

関西学院大学 研究成果報告

2018年10月29日

関西学院 院長殿

所属：経済学部
職名：教授
氏名：岡田敏裕

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： 米国 ） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	金融市場の不完全性が内生的技術進歩と景気循環に与える影響
研究実施場所	カリフォルニア大学サンタクルーズ校
研究期間	2017年 9月 1日 ～ 2018年 8月 31日（ 12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究課題「金融市場の不完全性が内生的技術進歩と景気循環に与える影響」に関して留学中に実施したことは主に以下の5点である。

第一に、本研究にかかわる、マクロ金融、国際金融及び景気循環論に関して最先端の知識を得るために、カリフォルニア大学サンタクルーズ校の教授であるCarl Walsh教授（学院留学の受け入れ教員、マクロ金融、景気変動論専門）とMichael Hutchison教授（国際マクロ金融専門）が大学院で開講している講義に出席し授業に参加した。講義で扱われた題材は最先端の研究論文であるので、扱われた論文等を講義前あるいは講義後に研究し、不明な点あるいは論文に関する批評などに関して質疑することにより、本研究課題の分野における最先端の知識を効果的に得ることができた。講義及び質疑から本研究課題のヒントになる点をいくつか得ることができた。例えば、Carl Walsh教授はその講義において、現在の景気変動の研究分野で主導的な役割を果たしているニューケインジアンモデルに対する数々の批判、例えば、中央銀行のゼロ金利政策の基での供給ショックが景気変動に与える影響に関して、ニューケインジアンモデルは現実を上手くとらえていないことなど、最先端の論文を紹介・解説されたが、それらに関して質疑することにより本研究課題に関する新たなアイデアを得ることができた。また、Michael Hutchison教授は講義において国際金融（為替などへの影響）とニューケインジアンモデルの関係に関する最先端の研究を紹

介し説明されたが、これは景気変動を分析する本研究課題において重要な要素であり非常に参考となった。また、本研究と関連するその他の最先端の研究に関して多くのことを両教授の教授から学ぶことができた。

第二に、カリフォルニア大学サンタクルーズ校では毎週国内外の研究者をセミナーに招き盛んに研究活動が行われているが、それらのセミナーに参加することにより、まだ公刊されていない段階の本研究課題に関連する最先端の研究も学ぶことができた。本研究課題と非常に関連性が高い研究も数多く報告され、セミナーにおいてそのような研究の報告者に時には質問等の形で議論できたことは大きなメリットとなった。また、カリフォルニア大学サンタクルーズ校の教員が現在研究中の研究を報告するセミナーやカリフォルニア大学サンタクルーズ校の大学院生が博士論文の研究を報告するセミナーにも参加し、本研究課題の関連分野に関する知見を高めた。関連分野に関するこれらのセミナーは総計で週二回ほど開かれていたが、それらの多くに参加することができた。

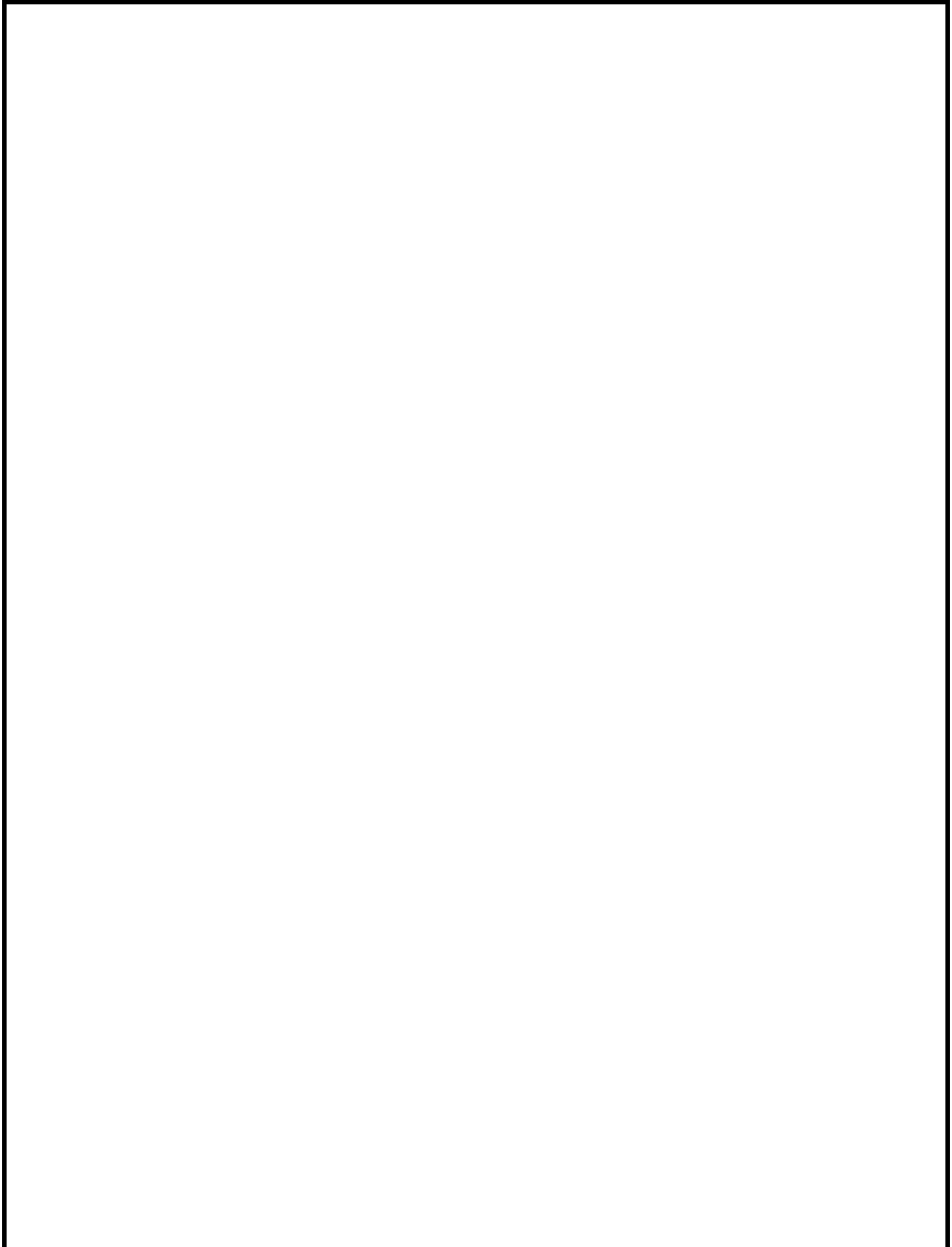
第三に、受け入れ教員であり、本研究課題に関する世界的権威であるCarl Walsh教授と、本研究課題に関するディスカッションを持ち、コメントを得ることができた。具体的には、本研究課題では、その中の一つとして、ゼロ金利政策における技術ショックが景気変動にどのような影響を与えるかを分析しているが、その研究に関するものである。前述したCarl Walsh教授が講義で扱った最近の研究によると、ゼロ金利政策の基では理論的には負の技術ショックは景気を上昇させてしまうが、実証上はそのような現象は起きておらず、この点が大きなパラドックスとなっており、現在このパラドックスを説明するために、盛んに研究が行われている。本研究課題ではこのパラドックスを解くことを目標の一つに定め、これに関する研究を留学中に行った。分析に際しては、パラドックスを解くことができる理論モデルの構築とそれに基づくコンピューを用いたシミュレーション分析を行った。この研究成果に関しては、Carl Walsh教授とディスカッションを行い、非常に有益なコメントを得ることができた。また、そこで得たコメントを反映させた分析を現在行っている。

第四に、本研究課題に関する論文の一つを留学研究機関中に完成させ、関西学院大学経済学部ワーキングペーパーとして発刊した。論文タイトルは、“International R&D Spillovers, Innovation by Learning from Abroad and Medium-Run Fluctuations”である(注1)。この研究において、留学中に理論モデルの構築とそれに基づくシミュレーション分析を行った。なお、この研究の分析および論文執筆に際しては、留学中のセミナーや講義で得た知見(特にマクロ金融分野)も反映されている。

第五に、金融市場の不完全性を含むマクロ景気変動モデル理論モデルに関する研究を行った。具体的には、内生的技術変化を組み込んだ景気変動モデルに金融市場における情報の非対称性を導入した理論モデルである。Great depression以来、近年のマクロ経済学分野では、金融市場の不完全性の重要性が認識され、多くの研究が行われてきた。この点に関して、留学中にCarl Walsh教授の講義から詳細に学ぶことができたが、金融市場の不完全性の導入だけではまだ解決できない事象があることも事実である。そこで、金融市場における情報の非対称性と同時に内生的技術変化を組み込んだ理論の構築を留学中に開始し、現在も引き続き構築中である。

注1)

Toshihiro Okada, 2018. “International R&D Spillovers, Innovation by Learning from Abroad and Medium-Run Fluctuations,” Discussion Paper Series 183, School of Economics, Kwansei Gakuin University



以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高
中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に
支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。